

「トポス」としての韓国と日本の戦後の記憶

『広場』と『万延元年のフットボール』にみえる「回帰」と「脱出」を中心に

中央大学大学院博士課程 チョウ ホン グ 趙 軒求

韓国の近代化は、一九五〇年の「韓国戦争」が終焉を告げた後から本格的に始まっている。それに対し、日本は百年ほど早い近代化を迎えていたが、「第二次世界大戦」の敗戦後、つまり一九四五年以後を以ってその近代化の再建に努める。両国は戦後の悲惨な状況から立ち上がろうとした共通点を持っているが、その進行方向においては「創建」と「再建」という異なるベクトルを持ちながら進んだと思う。一九一〇年の韓・日合併後、韓国は三五年間の長く続いてきた歴史的な断絶によって、戦後の近代化過程にも自立できず、政治・社会・文化などの多方面で日本と西欧のすべてを一方向的に受け入れるしかなかった。そういう近代化の歩みの中で、文学は「韓国戦争」を経験しながら戦時イデオロギーという特殊性を生み出し、独自の領域を構築する。その代表的な作家として挙げられるのが崔仁勲である。一方、大江健三郎は西欧思想の輸入とともに「私」との葛藤を抱えながら人間の内面世界を多様書き続けていた日本近代文学の歩みを引き続きながら、日本語の新しい表現を創造することで輸入された西欧思想を超える可能性を想像力の領域で構築する。このように独特の領域を構築した韓・日の二人の作家、その二人の作品活動の転換期の作品である『広場』と『万延元年のフットボール』を比較することで、韓国と日本の戦後の復興過程における特殊な社会状況を理解しようとする。つまり、「都市」と「広場」、そして「谷間の村」と「密室」のイメージを文学テキストの中から読み取って、それを「個人」と「社会」に置換する。そこから各々の

「トポス」が持つベクトルを「回帰」と「脱出」のベクトルに繋ぐようにして、それを基に韓国と日本の復興過程を「模倣的な創造」と「創造的な再建」として把握できる可能性を考察してみたい。

「敦煌」に見る井上靖の中国地域像

——河西回廊の道標的都市をめぐる——

大連外国語学院（大学）講師 ^カ何 ^{シユウ}志勇

『群像』の昭和34年新年特大号より5月特大号まで、「敦煌」は五回にわたって連載された。19年後の昭和53年5月、井上靖は中国側の招きを受け、初めて敦煌を訪ねた。つまり、井上靖は小説の舞台となっている地に行かないで、この小説を書いたのである。小説に登場させた敦煌及び敦煌に向かう途上に散在している河西回廊の都市について、井上靖は例えば京都大学人文科学研究所に所属していた藤枝晃の支援・指導を受けた他、西夏史、敦煌史などの歴史文献によりながら書き上げたのである。

ところが、研究や史書などの記す大まかな史実のほかに、井上靖は自分なりの想像力を駆使し、独自の中国地域像を構築したのだと考えられる。彼はいかに史実を物語の中に織り込んでいったか、また、いかなる想像をもって地域像を構築したのか、その想像の仕組みにはどんな特徴があるのか、オリエンタリズム的な語り方はないか。本稿の目的はこうした一連の疑問を解明しようとすることにある。

研究方法としては、主に作品のテキストに即しつつ、河西回廊上の都市についての語りを逐一検討したうえで、昭和50年代以降、井上靖が書いた中国紀行文、歴史エッセイ、美術エッセイをも参考にし、前後における「敦煌」の像の作り方の違いを比較しながら、その像の特徴と構築様式を明らかにしようとするものである。

また、文学的研究をする一方、史的研究も取り込もうと考え、西域史、西夏史、西夏文字、敦煌学などの学問の研究成果を十分生かして、史実としての地

域の实在と想像による像とのずれを追究した上で、その違いを生じた社会文化の背景と特質をはっきりさせ、いわゆる文化研究的視線を対象に当てたい。

中島敦と南洋

東京外国語大学大学院博士課程 ^{リク} 陸 ^{ゼン} 嬋

本発表では、昭和期の作家である中島敦の、昭和十六年六月から昭和十七年三月にいたる南洋庁編修書記として、当時の日本委任統治領であった南洋群島に赴任した体験を考察し、南洋行が作家の創作活動にいかなる影響を与えたのかを考え、この南洋体験の記憶を下地にして書き下ろされた南洋物（「南島譚」と「環礁」）の中島文学における位置付けを行いたい。

元来エキゾチックなものを好んだ中島敦は、ステイヴンスンの愛した南洋へ赴くことを喜んだが、南洋に到着した半年後に早くも「内地勤務」希望を提出してしまった。先学が指摘するとおり、作家の南洋で実現しなかった幾つかの念願が凡て外れてしまったのは事実である。このような自らの意志によって人生を構築できないという強い挫折感は、中島文学に頻繁に出てくるため、この作家の作品の一つの底流だと思われる。しかし、南洋でのこうした挫折体験が中島の創作活動に与えた影響は、さらに具体的に考えてみる必要があるであろう。東京に戻った後に示した強烈な創作意欲の原因も南洋行の挫折と関係があるのではないかと考えられ、南洋行への考察は中島文学研究における不可欠のステップだと言えよう。

南洋物は、現地での異文化体験・文化浸透への疑惑が主に書かれていると言われるが、南洋体験から生まれた挫折感と無力感も読み取れる。当時の南洋の「未開文明」への複雑な感情が示されていると改めて見えてこよう。そして、それは中島敦が帰朝した後に書き上げた主要作品『李陵』のひとつの伏線（異文化理解の可能性を試みた疑惑）にもなっていると思われるが、その起源は南洋体験と南洋物にあるということを具体的に示してみたい。

なお、他の同時代の〈南洋行〉を経験した日本人作家（高見順、石川達三ら）なども視野に入れながら考えていきたい。

テキストと〈境界〉の生成

——太宰治『津軽』におけるチェーホフの影響を中心に——

熊本大学大学院博士課程 ^{シン}申 ^{フクテイ}福貞

小山書店の「新風土記叢書」7として発表された太宰治『津軽』（1944）は、〈中央〉と〈周縁〉という視点から、〈反文化的な周縁世界〉への自己還元の旅、あるいは〈「仮寝」の場所にすぎない中央の「東京」から、存在の根源である辺境への逆行〉の旅として論じられてきた。また、風土記としての『津軽』が旅行記の体裁をとっていることも重視され、他の「新風土記叢書」との比較することによって『津軽』の方法論を明らかにしようとする論も見られる。しかし、〈故郷〉を語るにあたって旅を題材とした『津軽』に、チェーホフの『シベリヤの旅』（1934 訳）の影響がうかがえるということはあまり知られていない。太宰治の文学的営為がその初期の形成において 19 世紀ロシア文学の影響を受けていたことは良く知られていることである。とりわけチェーホフについては「葉」（1934）、「もの思ふ葦」（1936）など多くの小説やエッセイ等に言及されており、戦後においてもチェーホフへの関心は一貫していたものである。チェーホフが 1890 年に発表した『シベリヤの旅』は、流刑地であるサハリン島に行く途中で書かれた紀行文である。当時のロシア社会に大きな反響を呼び起こし、作家自身の文学活動の転換期ともなったサハリンへの旅は、ロシアの〈中央〉であるモスクワから〈周辺〉の流刑殖民地への旅であり、ヨーロッパからアジアへの旅でもある。そこには西洋に遅れて近代化を進めていたロシアのヨーロッパとアジアへの眼差しが表れている。両作品は形態上近似しているところが多く見られるが、『シベリヤの旅』が〈中央〉であるヨーロッパのモスクワから〈周辺〉のアジアのシベリヤへという二重構造の旅であるとするな

らば、表現空間としての〈故郷〉津軽への旅が、単なる日本の〈中央〉から〈周辺〉の内なる旅にとどまらない空間を〈越境〉する旅であると考えられる。このような視点から太宰のアジアへの眼差しと〈巡礼〉の内実について考えた
い。

周作人の日本文化観

——1930年代を中心に——

筑波大学大学院博士課程 カン レイ キ 韓 玲姫

1895年日清戦争敗北後、中国（当時は清政府）は日本の明治維新が果たした「富国強兵」、「文明開化」の成果に目を向け、西洋と日本の新しい思想と教育を求めて、1896年に最初の官費留学生13名を日本に派遣した。以後、日本を主な留学先として、多くの知識人が次々と日本を訪れ、その数は1906年に8000人以上達していたと言われている。

これらの中国人日本留学生の中に、その一生にわたって日本文化を翻訳紹介し続けた人物がいる。その名は周作人（Zhou Zuoren 1885-1967）である。周作人は1906年6月に4歳上の実兄魯迅とともに日本に渡り、立教大学で英文学とギリシャ語を学ぶ傍ら、江戸文芸に関心を示し出した。そして、その愛着は晩年に至るまでずっと続いたのである。

本稿では、周作人の日本への思いに焦点を当て、周作人の心の中の日本はどのようなものだったのか、なぜ彼は特に日本の古典文化に愛着を持ち続けたのかを明らかにし、彼の日本文化観を中心に検討を加えた。

本研究を通して、周作人が日本に対して特別な愛着を持ち続けられたのは、当時日本に留学した中国知識人とは違って、「半分は異境で、半分は古昔」である日本を発見し、中国の古昔を超えた創作の文化を見出したからだということが分かった。

そして、満州事変から日中全面戦争の直前といった日中関係の最も悪化していた頃に、「東京を懐かしむ」思いを継続して綴り、次々と日本留学の記憶と日本論を発表したのは、永井荷風が「日本社会の風俗人情が変わっても浮世絵

の生命力だけは変らない」といったように、日本の古典文化の生命力を信じつつ、文化の高名と現実の粗悪の懸隔に対する寂寞からだということを明らかにした。

さらに、帰国して新文学運動の中で彼が最も力を入れて翻訳、紹介したのは、日本の和歌、俳句、川柳、浮世絵などの古典文芸であり、晩年には日本の古典の傑作の翻訳にすべての力を注いだところに彼の日本文化観が窺える。

禁野交野の記憶

——持明院基春と鷹書——

立命館大学大学院博士課程 オオツボ 大坪 マイ 舞

室町後期においては鷹書が盛んに生成されていく。持明院基春とその子基規は、多くの鷹書の執筆・書写に携わると同時に、入木道・郢曲道の家を確立し、室町後期の公家の芸道を研究する上で注目すべき父子である。

鷹は本来は公家のものであるという認識があった。ならば持明院家の鷹書についても、鎌倉期鷹狩を好んだ西園寺家の名を冠する鷹書類の影響下に成立した言説を持つと予想され、事実西園寺家の名を冠した鷹書類を基春が書写した例も見出せる^①が、一方で美濃下向期間が長かった基春の鷹書類には、美濃土岐氏の鷹書を書写したものも確認されている^②。公家の芸道伝授は飛鳥井家による蹴鞠伝授のように公家から武家での過程が想定される。しかし基春は飛鳥井家から土岐氏に相伝された蹴鞠書を書写するなどしており、京公家から地方武家への芸道伝授という安易な視点のみでは捕捉し得ない室町後期の文芸空間が想定される。

さて、京ではなく美濃で過ごすことも多かった基春の鷹書においては京都における天皇の鷹狩にまつわる記載が多く含まれている。中でも禁裏御料の狩場であり、日次の贄を献上するために鷹狩が行なわれた交野は歌枕としても定着しており、和歌に多く詠まれると同時に、基春の鷹書にも記載がみられる。

本発表では、持明院基春周辺を中心に中世における禁野交野の記載を検討することによって、室町後期以降、公家の地方下向が盛んであった時代における在国、京という二つの空間を、その精神も含めて明らかにすることを目的とする。

[注]

- ①二本松泰子「中世公家社会における鷹術伝承の成立—立命館大学西園寺文庫蔵『西園寺鷹口傳』所載の鷹説話群の検討から—」（『説話・伝承学』第15号、2007年3月）
- ②中澤克昭「持明院家の歴史と鷹書—基本的な情報の整理まで—」（鷹書研究会、2008年5月例会口頭発表）

＜南山＞としての吉野

——終南山との関わりを中心に——

西北大学教授 ガオ 高 ビンビン 兵兵

日本では、吉野山が古来「南山」と呼ばれた。それは、古都藤原京や平城京の南に位置することに因んでいる。

いっぽう中国では古来、「南山」は都城長安の南にある終南山を指すことが多かった。潘岳の「関中記」に「其山、一名中南、言在天之中。居都之南、故曰中南」とあるように、終南山は都の南にあることから、天の中央にある山となされ、秦漢隋唐の歴代にわたって、中国古代都城の位置を決める重要なランドマークであった。また、新羅の王京であった慶州の南にも「南山」という山がある。

中日韓三国にわたって、古代都城の南に「南山」があるということは、決して偶然ではない。慶州が唐長安城を模倣し、藤原京が慶州を模倣したというのがほぼ定説となっている^①。また、平城京はただ藤原京より北に移されたのみで、南北の中軸線はほぼ変わっていないのも注目すべきことであろう。

藤原京や平城京の、中国古代都城との関わりについては、盛んに論じられてきたが、終南山と吉野の関わりについて提示したのは、千田稔氏と中西進氏による数少ない論説のみである^②。中西進氏は『万葉集』の「藤原京の御井の歌」（巻一・52）を取り上げ、「吉野の山は影面の大御門ゆ」が『史記・秦始皇本紀』にある「表南山之巔以為闕」を意識したものとされ、「長安の都を範として、画期的な都を作ろうとした時、終南山は必須の造都条件だったに違いない」と述べた^③。

しかし、終南山と吉野山の関わりは、都城との位置関係のみに止まらないと

思われる。終南山は『詩経』に盛んに詠みこまれており、王権永固、不老不死、自然豊富という多面において聖性を持つ山とされる。そして、道教の発祥地として、古来神仙境と見なされた。また、「商山四皓」を始めとして、帝都の権勢から逃れる隠逸者の住むところでもあった。そして終南山がもつ以上の複数のイメージは、吉野山もすべて持っている。

本発表では、『万葉集』、『古今集』、『新古今集』の歌をメインに取り上げ、多角度から「南山」としての吉野が受けた中国の影響を明らかにしたい。

[注]

- ①千田稔「古代朝鮮の王京と藤原京」(上田正昭『古代の日本と東アジア』小学館 1991 年)
- ②千田稔「都城選地の景観を視る」(岸俊男『日本の古代 9 都城の生態』中央公論者 1987 年 4 月)、
中西進「終南山と吉野」(『しにか』創刊号、1990 年 4 月)
- ③中西進「終南山と吉野」(『しにか』創刊号、1990 年 4 月)

参考文献

- ・増田繁夫「「吉野山」と「ふるさと」—平安朝和歌史の一節—」(『人文研究』第 29 巻第 1 分冊、1977 年 10 月)
- ・辰巳正明「人麻呂の吉野讃歌と中国遊覧詩」(『万葉集と中国文学』笠間書院、1987 年 2 月)
- ・太田善之「奈良朝の吉野讃歌—敘景と神仙世界」(『日本文学研究』38 号、1999 年 2 月)

ポスターセッション題目

テキストに潜在する記憶としての異郷
——贅気楼化する龍宮とその周辺——

苫小牧駒澤大学教授 林^{ハヤシ} 晃^{コウ} 平^{ヘイ}

俳諧文芸と風土
——京と江戸を中心に——

京都産業大学研究員 西^{ニシ} い^イ お^オ り^リ

『雨月物語』における離郷する人たちの運命をめぐって
——儒家思想を背景に——

首都大学東京大学院研究生 岳^{ガク} 遠^{エン} 坤^{コン}
北京外国語大学大学院博士課程

明石君と紫上との協働的關係

名古屋大学大学院博士課程 MYERS^{マイヤズ} Michelle^{ミッシェル}

上代人にとっての「瀬」
——「苦瀬」をめぐる考察——

早稲田大学大学院修士課程 高橋^{タカハシ} 憲^{ノリ} 子^コ

川端康成「禽獣」の時間と空間

広島大学大学院博士課程 王^{オウ} 薇^ビ 婷^{テイ}

中島敦「狐憑」論
——無文字社会における「記録」——

大阪府立大学大学院博士課程 趙^{チョウ} 楊^{ヨウ}

楽の変遷
——辞書の用例から——

総合研究大学院大学博士課程 江崎^{エサキ} 公^{キミ} 子^コ
国立音楽大学准教授